



かとう たかお
加藤 隆生 さん
株式会社SCRAP代表

「リアル脱出ゲーム」の考案者

日常を非日常に変えて 人生を楽しもう

今や社会に一大ブームを巻き起こしている「リアル脱出ゲーム」。人気は海外にも広がり、アメリカ、中国、シンガポールなどでも開催されています。その生みの親が同志社大学の卒業生です。

日常を非日常に変える

リアル脱出ゲームについて教えてください。

加藤 ある部屋に参加者は突然閉じ込められます。その閉ざされた空間にはアイテムや暗号、パズルが隠されていて、それを参加者が協力して探し、謎解きをして脱出する。参加者が実際に物語を体験できるゲームイベントです。舞台はビルの一室であったり東京ドームであったり、島全体だったり。参加者同士でコミュニケーションを取らないと謎解きができなから、人と人との距離が縮まって盛り上がりします。例えば「月面基地からの脱出」がテーマの時は、ゲームと分かっていてもまさに生死を分けるストーリー。最後のどんでん返しで感極まり、大勢のお客さんが涙を流していました。実は一番盛り上がるのはゲームが終わった後なんです。あそこが面白かったとか、あの謎は難しかったとか。家族で参加してコミュニケーションが深まったという声もいただきました。こんなふうに「帰って帰れるエンターテインメント」を目指しています。

——そこまで世代を超えて楽しめる理由は何だと思われますか。

加藤 こういう遊びがあった方がいいことが分かったからではないでしょうか。東京ドームで公演をした時は、広いドームの中にパネルをたった20枚貼っただけでした。撤収時間はわずか15分で、ドームの人に驚かれました(笑)。その時に思ったのは、日常と非日常とは紙一重だということ。20枚のパネルだけで、退屈な日常を熱狂的な物語にできるんだと思いました。

——最初は何に着想を得たのですか。

加藤 僕は子どもの頃から謎解きが大好きでした。図書館でホームズやルパンなどを好んで読んでいました。いくつかの謎を解いていって、最後にパチツと鍵が合う、考えられなかった結末になる。そのプロセスと結果が楽しかったですね。それが高じて、親戚や友人を巻き込んだ宝探し大会もしました。京都市内のあちこちにヒントを隠して、最後は車12台を使って約60人が参加する一大イベントに。謎解きの質も向上して、これは面白いなと。ただ当時は、それをビジネスにしようとは思っていませんでした。

——子どもの頃からの体験を温めて、現実にしたということですか。

加藤 というより、とにかく物語の中に自分が入り込みたかったんです。例えば

「ドラえもん」では、のび太君のもとにまたまたドラえもんが現れるわけです。のび太君は特に何か努力をしたわけでもないのに。なぜ僕はその中に入れないんだろうと悔しくて、ずっとこだわっていました。だから音楽やイベントやフリーペーパーなどをやってきて周囲にいろんなスタッフが揃い、リアル脱出ゲームという発想に思い至った時に、僕は飛びついた。絶対に面白いと。実現する前に、その面白さが鮮やかに見えた。後は突き動かされるように進みました。

たとえ少数派になっても 自分らしく生きる

——現在に至るまでをお聞かせください。
加藤 大学を出た時、僕がやりたかったのは音楽でした。少しでも音楽に時間を割きたくて実家から一番近い会社就職したけれど、そのまま鳴かず飛ばず。会社には不満はなかったのですが、2年ほど勤めた時に「生き方を変えよう」と決心しました。音楽をしたり好きな文章を書いたりして、自分の創り出すもので稼ごうと。逆に、それ以外のことをして稼ぐなら貧乏をした方がましだと覚悟しました。その時初めて「ああ、一般的な人生のレ

ールから逸れるんだな」と思いましたね。音楽のためにそういう就職の仕方もしたけれど、考えてみれば僕は子ども時代から大きな流れに乗って生きてきたわけですから、これで完全にマイノリティーへ行くんだなと。

——その不安よりも、本当にやりたいことの方が勝ったのですか。

加藤 狭いコミュニティでは評価されていたけれど、自分の音楽の才能の有無をちゃんと確かめたかったです。でも28歳になって少し焦りましたね。かれこれ10年くらい音楽を続けてきたが、バンド仲間も僕も食べるために社会人をしてた。でも僕は死に物狂いで音楽だけをやっていく人とやりたいと言ったら、全員辞めてしまった(笑)。その後作ったのがロボピッチャーというバンドです。集客も増えて2年目にはメジャーデビューしたので、あのリセットは間違っていないかと思えます。ただ、それ以上へ行くとためには自分たちで積極的に宣伝しないとだめだと思った。そのために企画したイベントの宣伝用にフリーペーパー「SCRAP」を作りました。その誌面で脱出ゲームの特集を組み、100人くらいで開催したのがリアル脱出ゲームの最初です。

——ご自分で大きな流れを作られたのですか。

加藤 それまでの僕は音楽をやりながらも、会社など、どこかに入れてもらうことばかり考えていたんですね。ある編集プロダクションで仕事をしてた時、社長が会社のお金を持ち逃げして、ひどい目に遭いました。その時、もう使われるのは止めよう、自分でやった方がずっといいと思った。そう考えると、支払われなかった給料も授業料と思えました。

——今、加藤さんの志はどこにありますか。

加藤 東京ドームの公演を機に最近思うのですが、毎日の生活が辛くてたまらないと言う人がいたら、僕はこう言いたい。そんなことないですよ、20枚のパネルが日常を非日常にしたように、毎日紙切れ一枚で変わるんですよ。だからリアル脱出ゲームを楽しむように日常を過ごせば、もつとハッピーになれるんじゃないかな。物語ってテレビの向こう側みたいにならずと遠い場所にあるんじゃないかと、ここにあるんだと。それがリアル脱出ゲームを通して、ぼんやりとですが世の中に伝えたいことです。

(2013年11月28日)



栗田 千寿 さん
陸上自衛官

国連PKOに個人派遣

女性の視点で 国際平和構築を

女性自衛官として初めて国連PKOに個人派遣され、数少ない女性幹部自衛官として働く卒業生がいます。

自然に選んだ道

今の仕事の内容をお聞かせください。
栗田 統合幕僚監部防衛計画部防衛課防衛交流班に所属して、東南アジアを担当しています。外国の関係者を交えた会議があれば日本の立場を説明する資料を作成したり、統合幕僚長のサポートをしたりするのが主な仕事です。

自衛官を志した経緯を教えてください。

栗田 祖父がシベリア抑留体験者で、戦友会を作ったり体験記を自費出版したりしていました。家庭にそういう軍隊経験者の空気があったんですね。そこへ小学5年生の時、卒業式で「君が代」斉唱時に起立しない児童がいた。単純に違和感を抱きました。その頃から子ども心に、戦争って何だろうとか、国を守ることや国の誇りなどについて徐々に考えるようになっていきました。自衛官という仕事を詳しく知ったのは高校3年生の時です。私の道は「これだ」と思いました。

女性が自衛隊に入ることについてためらいはありませんでしたか。

栗田 同志社女子中・高校時代は自由な校風に包まれて女子だけで何でもやってきたので、男女間の線引きというものは

あまり感じませんでした。

自衛隊での生活は非常に厳しいイメージがありますが…。

栗田 幹部自衛官になるには幹部候補生学校に入校して、約1年間厳しい訓練を受けます。将来の幹部になるのですから、体力、生活面で鍛えられただけでなく、リーダーシップを磨くなど幹部にふさわしい人間としてのしつけをされました。約100キロの行軍はさすがにきつかったですね。20キロのリュックを背負って4キロの小銃を持ち、顔も緑に塗って（笑）。学校を出て2年目で小隊長になりましたが、最初は隊員に教えてもらいながらの毎日。作業に戸惑い、陸曹から「この素人！」という声が飛んできたこともあります。厳しさの中でも皆さんに支えられながら鍛えていただきました。

PKO参加で見た 女性自衛官としての道

女性幹部候補生として、最初から特別な思いはお持ちでしたか。

栗田 入隊時からそれをずっと考えています。実は幹部候補生学校試験の面接で「女性の方が向いている仕事は、ここにはないと思う」と言われたんです。私は

なったそうです。

突き詰めると、女性だからこそその視点とは何でしょうか。

栗田 母性ではないでしょうか。私の部下も日常のいろんなことを気軽に話してくれましたし、東ティモールでも迷彩服を着ているPKO隊員が女性だと分かる。男性まで警戒心を解いてくれた。自衛隊も男性社会だからこそ、組織として女性の部分を失ってはいけないと思います。ただ、母性はすべての女性に無条件に備わっているものではないと思うので、意識して育てる必要があると思います。

東ティモールで日本の自衛官として心がけたことはありましたか。

栗田 相手に敬意をもって接するという、日本人の美点は大切にしました。奥地の村へ行くときなどはよくお菓子を持参しましたが、他国出身の同僚の中には、子どもたちに向かって車の窓から飴を放る人がいました。私は飴を一人ずつ手渡したり通訳にもきちんとお礼を言ったりと、日本人なら普通にすることをしただけですが、現地の人たちはちゃんと見ていてくださったんですね。「日本人は好きだ」と言ってもらえた。コンパクトフォトプリンタを日本から持参して現地の女性たちを撮って写真をあげて、とて

も喜んでもらったこともあります。PKOに個人派遣で参加すると現地での生活費が支給されるため、言い方はよくないのですが出稼ぎとして来ている他国出身の同僚もいるなか、日本人は持ち出しをしてでも現地のために何かしたいと思う傾向もあるようです。

自衛隊の国際平和協力活動の認知度を高めるといふ使命も感じておられたのですか。

栗田 もちろんそうです。国連の一員として平和構築のために働きながらも、国益のために働いているという意識が強くありました。それに自衛隊の海外派遣は今まで一人も犠牲者を出していません。国内世論に大きな影響を与えることなので、絶対に犠牲を出さずにはいられないという決意も持っていました。

将来はどんな分野で働きたいですか。

栗田 今の仕事や東ティモールでの経験をもとに、防衛交流やPKOを含めた国際的な活動ができればと考えています。女性自衛官の活躍の場が増えるような支援もしていきたいですね。

（2013年12月4日）